

ファール所縁の地を訪ねる蝶の旅

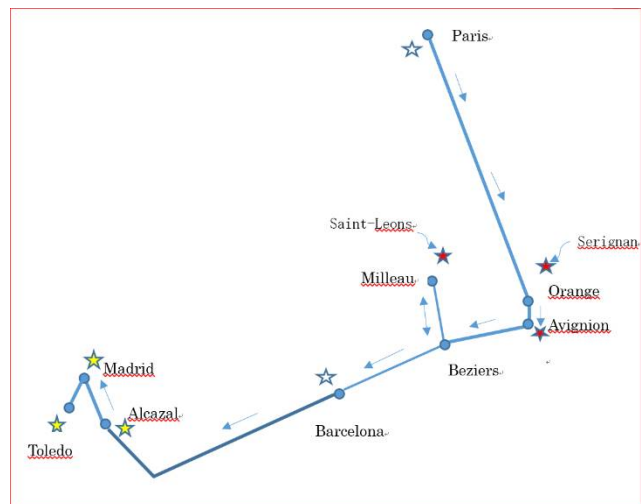
臼杵 浩志(5回生)



未だ、完全には読んでいなかった「ファール昆虫記」を読み、最近見つけた「ファール昆虫記の旅」(奥本大三郎・今森光彦共著:新潮社)を参考にしながら、パリ起点、マドリッドを終点とする「ファール所縁の地を訪ねる蝶の旅」をした。ファール所縁の地は、とりあえず、①終の棲家「アルマス」のあるセリニャン／オランジュ、②師範学校時代のアヴィニョン、③生家

と「ミクロポリス」のあるサン・レオンの3つを、生き立ちとは逆に回り、その後、スペインまで足を延ばして美術館めぐりをしながら、ヨーロッパ蝶の偵察を行った。欧州域内の移動は、Eurail pass による鉄道利用とした。

日本出発は平成29年5月31日(水)午前、パリ到着は同日夕方、時差ぼけ解消のためパリに2泊し、6月2日(水)のTGVで南仏に向かった。スペインを含む旅の全行程は、5月31日(水)～6月17日(土)帰着の18日間である。



1. セリニャン／オランジュ:ファール博物館「アルマス(Harmas)」:

6月2日(水)、快晴。パリ・リヨン駅7:41発アヴィニョン行きTGVに乗ると、オランジュ(Orange)に11:03に着く。オランジュ駅は小さな駅(写真下)で、到着時タクシーが見当たらず、タクシーを呼ぶのに苦労したが、何とかホテルにチェックインできた。まずは、ファール博物館「アルマス」へと、ホテルに荷物を置き、フロントでタクシーを呼んで貰い、時間的ロス避けるため、行きはタクシー、帰りはバスとした。セリニャン村までは僅か6Kmで、タクシーは、写真ではよく見知ったカマキリのオブジェ脇を、難なく「アルマス」到着。入口広場でタ



クシーを降りると、花かと思紛う夥しい数の白いマイマイと、小さな黄色っぽい蝶(シロジャノメ)が我々を迎えてくれた。



＜ファーブル博物館:アルマス＞

「アルマス(Harmas)」とは、フランス語で「荒地」を意味し、ファーブルが50歳を過ぎてやっと手にいれた「生きた昆虫の研究所」兼「自宅」の名前。ファーブルは晩年の約30年間にここに住み、研究生活を楽しみながら「ファーブル昆虫記」を執筆した。現在は、「ファーブル博物館」(写真左)として一般公開されている。

正門を入ると右側入り口脇に受付があり、ここで入館料を支払い、展示室を見学する。2階建ての展示室には、ファーブルの蒐集した昆虫、貝殻、化石、植物標本や研究成果等とともに、愛用の帽子、机、顕微鏡などが展示されている。

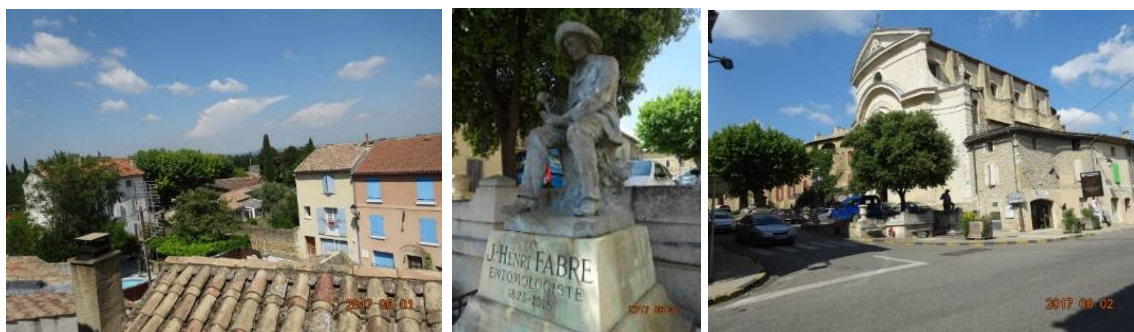


展示室見学後は、実験圃場(庭園)に出て、トレイルを散策する。実験圃場は、石堀で外部と遮断され、ところどころにはファーブルが工夫、使用した実験設備が再現されている。蝶は、思いのほか少なかったが、それでも、ラベンダーの花咲く場所には、



モンシロチョウやマキバジャノメ、蜂の仲間が飛び交い、吸蜜していた。アルマスの蝶は、大部分がこのラベンダーの花周辺で撮影したものである。

「ファーブル博物館」見学後は、セリニャン村の中心部に移動し(歩いて5～6分)、村落の古い家並み、ファーブル像や泉等を見て回り、一軒しか開いていなかったオーブン・カフェで生ビールを一杯飲んで一息ついた。



<「アルマス」で見かけた蝶>



マキバジャノメ

Coenonympha pamphilus

英名: Meadow brown



モンシロチョウ

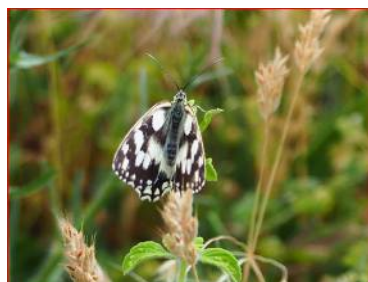
Pieris rapae



オオモンシロチョウ

Pieris brassicae

前翅斑紋内側彎曲、大型



ヨーロッパシロジャノメ

Melanargia galathea

英名: Marbled white



ヨーロッパアカタテハ

Vanessa atalanta



キマダラセセリ(?)

Thymelicus lineolus

<オランジュ第2日目>

オランジュは、嘗て、ローマ帝国の重要な町として栄え、世界遺産の古代劇場や凱旋門が有名なところである。そこで、オランジュ2日目は、町なかにある「古代劇場」を観光した。この古代劇場は、丘横に巨大な舞台、丘斜面に石積み(観客席)を建設して作った非常に大きなものである。2000年以上も前に作られたものであるが、今もほぼ完全な形で保存、活用される、音響効果のすばらしい劇場である。今日も天気は快晴、我々は、朝一で訪れていたところ、散歩途中と思しき乳母車を押した女性(声楽家?)が突然現れ、歌一曲を綺麗なソプラノで練習のように披露してくれた。早朝の澄んだ空気に、歌声が劇場一杯に響き渡って、音響効果の素晴らしさが図らずも実証されることとなった。その時の印象は強烈で、今も強く頭に残っている。



2. 師範学校に学び、教師時代を過ごしたアヴィニョン:

「ファーブル所縁の地」の2つ目の訪問地は、ファーブルが師範学校に学び、教師時代を過ごしたアヴィニョン(Avignon)である。6月4日(日)午前、オランジュから普通列車15分程でアヴィニョンに着く。天気は、今日も快晴。

アヴィニョンは、中世に教皇庁が置かれた南仏プロバンス中心の町。ファーブルは、ここアヴィニョンの師範学校で15歳から給費生として学び、師範教師時代に約30年間を過ごしている。ここでの興味は、①ファーブルの師範学校やファーブルの3つの家を探してみること、②ファーブル自身が館長をつとめた、親友ルキアの「ルキアン博物館」を見学すること、③ファー



ブルが何度となく登ったというバントゥー山を眺めること、そして、出来れば(これが本当の願いだが)、④アヴィニョン北西部のレ・ザングル(Les Angles)の丘でフンコロガシ(スカラベ・サクレ)を観、コブツチスガリの棲むカルパントラ(Carpentras)の切り通し等に行ってみること、である。南仏は初めてではないが、土地勘なく、レンタカー利用も危険で考えられず、④はハードルが高い。さらに、何ととってもファールブルの時代は150年以上も前のこと、変わってしまっているかも知れず、Google map のストリートビューを眺めてみても、どこだか定かではない。



アヴィニョンは、城壁に囲まれた小さな町で、④以外は歩いて簡単に回れそう。そこで、先ずは、ホテルから近い「ルキアン博物館」に行ってみる。しかし、残念ながら、日、月曜日は休館日で、見学出来ず。次いで、サン・ベネゼ橋(アヴィニョンの橋:写真下左)まで行ってみた。橋の袂に、ラベンダーが咲いていたが、蝶は見かけず、ファール

ブルが何度も登ったというバントゥー山を遠くに眺めるに止める(写真下右)。



<アヴィニョン第2日目>

朝、一人でファールブルの2番目、3番目の家方面を散歩してみる。駅前のレビュブリック門を入り、観光案内所先を右折してアンリ・ファールブル通りを暫く歩くと教会があり、水車が沢山ある小川のあるタンチュリエ通り(Rue de Teinturies)に出る。ここに至る手前北方に2番目の家、タンチュリエ通りを暫く城壁の方向に進んだあたりに3番目の家があるようだが、地番不明、表示もないので、定かには判らない。しかしながら、嘗てファールブルが生活した家の近くまでは来ていると思われ、ある程度の雰囲気は感じとることができた。タンチュリエ通りは木陰の多い静かなところで、ところどころにオープンカフェがあっ



て、多くの人たちがゆっくりと流れる時間を楽しんでいるようだった。



その後は、連れ合いと合流し、教皇庁を見学後、ミニトレインで市内観光して、一番目の家があるというクリヨン広場方面から休館中のルキアン博物館の前をブラブラと散策しながらホテルに戻る。

3. 生家と「ミクロポリス」のあるサン・レオン:

6月6日(火)早朝、アヴィニオン・サントル(Avignon Centre)駅6:38発の普通列車でベジエ(Bezies)まで行き、ベジエでヌサルグ(Neussargues)行に乗り換えてミヨー(Millau)到着11:27。ミヨーは、結構大きい町で、駅には観光案内所もあったので、サン・レオンの情報を入手してから、ホテルにチェックインした。この日は移動日で時間的に中途半端で動けず、フロントにて翌日のサン・レオン(Saint-Leons)までのタクシーを手配して貰い、市内観光をして過ごす(写真右は、最近TVコマーシャルなどで有名になったミヨー大橋)。



<ミヨー第2日目:ファールルの生家と「ミクロポリス」のあるサン・レオン村>



サン・レオン村はミヨーから北に約20km、公共の交通機関はない。6月7日(水)、手配のタクシーにて10時頃、ミクロポリス到着(42€)。タクシーに、16時に再度、迎えにくるよう頼んで、ミクロポリス入場。

ミクロポリスは、偉大な昆虫研究家ファールルに敬意を表し、カンヌ映画祭で技術賞を受賞したドキュメンタリー映画「ミクロコスモス」をき

かけに設立された昆虫の世界を主題とするテーマパークである。室内昆虫館には、蟻、蜂、蝶など、様々な生きた昆虫や標本などが展示されている。見学者が昆虫の世



界にあたかも紛れ込んだかのように工夫され、室外に出れば、随所に、蟻、カマキリ、バッタ、蝶やキノコなど、巨大なカラフルなオブジェがあり、挙句の果ては何だか解らない妖怪までが設置されていて、近づく音楽までが流れるよう工夫されている。遠くにはファーブルの生まれたサン・レオンの村落が古いお城や教会とともに一望できて、南仏ののんびりとした静かな田舎風景が堪能できる。ミクロポリスは2-3時間でざっ



と見まわったのち、付属のレストランで生ビールなどを飲みながら昼食、その後は谷を降りて、反対側斜面のファーブルの生家に向かった。



ジャン・アンリ・ファーブル(1823-1915)は、ここサン・レオンに生まれ、一時期、マラヴァルの祖父の家に預けられた時期はあるが、9歳までここサン・レオンで過ごし、ファーブル昆虫記にも様々な幼児期の体験が記載されている。生家は、古城脇の小さな家で、庭には、虫眼鏡で木にいる虫を観察しているファーブルの銅像が設置され、毎年8-9月頃には一般開放されて見学できるが、

我々が訪問したときは閉鎖中であつた。聞けば、ここサン・レオンに一般にはあまり知られていないが、1軒だけホテルがあるらしく、また、来る機会



があれば、何泊かしてゆっくりすれば、ファールが幼児期に遊んだミュズ(Muse)川やマンソネスクの丘等も見て回れるのではないか、などと思う。

<サン・レオン(Saint Leons)で見かけた蝶>

ミクロポリスの屋外散策道で敏捷に飛ぶタテハ蝶を1-2回見かけたが、確認出来ず。また、Jardin d' insects 近くでカウ・ベルの音を聞いたので、近寄ってみるとやはり牧場があり、牛がいて糞も落ちていたが、有刺鉄線があり、近寄ることは出来なかった(ここには糞虫はいないと思われるが)。



マキバジャノメ

Lasiommata megera

英名: Meadow brown



マキバジャノメ

Coenonympha arcania

英名 Meadow brown



4. スペイン: ラ・マンチャ & マドリッドの観光と蝶の観察:

「ファール所縁の地」探訪終了後、スペインのバルセロナ、アルカーサル・ド・サン・ファン、トレド、マドリッドまで足を延ばし、美術館を中心にした観光旅行をしながら、併せて蝶の観察を行った。



6月8日(木)早朝、ミヨー始発6:00発の電車にて、ベジエに戻り(7:50着)、マルセーユから来た国際特急AVE(10:16発)に乗り換えてバルセロナに移動した(12:38着)。以降、バルセロナ(3泊)、アルカーサル・ド・サン・ファン(1泊)、トレド(1泊)、マドリッド(3泊)の観光旅行をして、6月16日(金)のBritish AirでLondon Heathrow経由にて、6月17日(土)成田帰着、全行程18日間の海外旅行を終えた。以下、蝶の観察をする機会がなかったバルセロナを除き、アルカーサル・ド・サン・ファン、トレド、マドリッドについて追記する。

(1) アルカーサル・ド・サン・ファン:



ラ・マンチャ地方はドン・キホーテの舞台。綺麗な風車があちこちにあるというので、アルカーサル・ド・サン・ファンで途中下車し、駅近の Intur Hotel に1泊、タクシーをチャーターしてアルガマシーリャ・デ・アルバ、コンスエグラ、カンポ・デ・クリプターナ等を忙しく見て回った。蝶の探索は、ホテル横の公園。朝、夕に散歩がて

ら探してみたが、この公園は結構広くて、立派なもの。花壇には沢山のラベンダーが咲き、蝶やとんぼ、綺麗な鳥などを見かけた。特に、朝の散歩の折には、ラベンダーに蝶を多くみかけ、色々な写真が撮れた。中でも、一番の収穫は、今まで見たことがない、綺麗な「クレオパトラヤマキチョウ」の写真が撮れたことである。



<アルカーサル・ド・サン・ファン(Alcazar de San Juan)でみかけた蝶>



ヒメアカタテハ
Vanessa cardui



クレオパトラヤマキチョウ
Gonepteryx cleopatra



キマダラヒカゲの仲間
Pararge aegeria



モンシロチョウ
Pieris rapae



モンキチョウの仲間
Colias crocea.



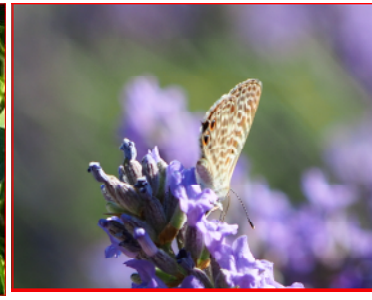
クモマツマキチョウ(♀)
Anthocharis cardamines



イカルスヒメシジミ♀
Polyommatus icarus



イカルスヒメシジミ♂
Polyommatus icarus



ウラナミシジミ
Lampides boeticus

(2)トレド:



マドリッド滞在中に、今回は、是非トレドへと、パラドル・ド・トレド(Parador de Toledo)を予約しておいた。このホテル下には、狭いが芝生を張った庭があり、シジミチョウ、モンシロチョウが飛んでいて、ラベンダーにはクレオパトラヤマキチョウやクモマツマキチョウ(♀)らしき蝶もいた。クレオパトラヤマキチョウは、崖っぷちのラベンダーの花にたまに止まるが、直ぐ逃げ

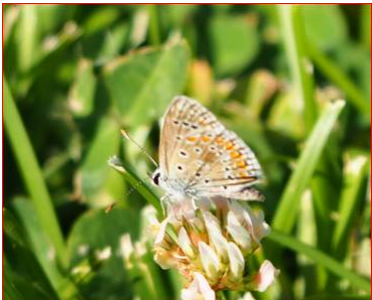
るので撮影は叶わなかった。



クモマツマキチョウ(♀)
Anthocharis cardamines



マキバジャノメ
Lasiommata megera
英名: Meadow brown



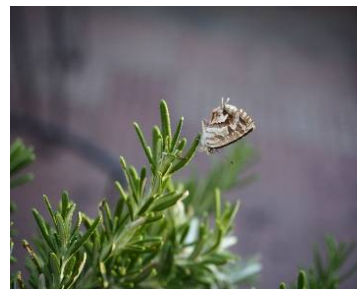
イカルスヒメシジミ♂
Polyommatus icarus

(2)マドリッド:



マドリッドでは、夕方であったが、アトーチャ駅近くの、車通りが多い道路脇のオープン・カフェの植え込みに小さなシジミを発見した。じっと止まっており、撮影は容易であったが、名前が判らず、「名無しの権兵衛」として原田会長に「何だろう？」とメールしたところ、すぐ返事があり、アフリカから最近ヨーロッパに帰化して町なかで増えている「ゼラニ

ウム・ブロンズ」という珍しいシジミチョウだと判明した。車の沢山走る町なかで蝶？とも思ったが、原田会長からはゼラニウムが食草であり、町なかにはいたとしても可笑しくない、との説明もあって、然りと、合点した。



4. 終わりに:

ファールブル所縁の地については、①セリニャン／オランジュ、②アヴィニョン、③サン・レオンの3カ所を、各2泊ずつ、全行程1週間をかけて回ってみたが、やはり移動のための車がないことや、事前調査が不十分で休館日にあたったりして、考えていたほど十分な成果があげられなかった。セリニャン／オランジュでは、タクシーがつかまらず、通りがかりの人に随分、迷惑をかけ、疲れのため、遂に凱旋門は見る事ができなかった。アヴィニョンでは、ルキアン博物館が休館日で見学できず、師範学校の場所も十分に確認することが出来なかった。サン・レオンでもオランジュに宿をとったため、時間が足りず、ミュズ川や、マンソネスクの丘など周辺地域の散策は出来ず仕舞いとなった。ファールブルがルキアンと知り合ったコルシカ島までは行ってみたいとは思わないが、やはり、ファールブルがフンコロガシに感動したというアヴィニョンの「レ・ザングルの丘」や、コブツチスガリを観察したという「カルパントラの切り通し」などは、また、チャンスがあれば、是非行ってみたいところ。次回(もしあれば)は、もう少し綿密に計画を立て、もう一ヶ月遅い、ラベンダー最盛期(7月)に、バントゥー山エリアや、ロデーズ(Rodez)、トゥールーズ(Toulouse)をも含めて計画してみたい、と思う。

ヨーロッパの蝶としては、結局のところ、全部で13種類<シロチョウ(5種類)、タテハチョウ(5種類)、セセリチョウ(1種類)、シジミチョウ(2種類)>と、初めてにしては、思いのほか沢山の蝶を確認することができた。どこでも数多く見られたのは、やはりモンシロチョウ／オオモンシロチョウやルリシジミの仲間、アカタテハやマキバジャノメ(meadow brown)もどこにでもいるような感じであった。珍しいと感激したのは、シロジャノメ(marbled white)、クレオパトラヤマキチョウ、ゼラニウム・ブロンズ(Geranium

bronze、和名なし)で、シロジャノメは、飛んでいると黄色く見え、初めはトラフアゲハかギフチョウ?等を考えた。クレオパトラヤマキチョウは、日本でも図鑑でしかみたことがないスジボソヤマキチョウの近縁種、その名のとおり非常に綺麗な蝶である。ゼラニウム・ブロンズは、アフリカからの外来の蝶で、珍蝶だそうである(原田会長談)。もう一つの驚きは、日本で多くみかけるアゲハチョウを、旅行中に全く見かけなかったことである(トラフアゲハは、見られるのではと思っていたが)。

蝶の同定にも苦労した。当然、日本の常識があてはまらず、英名、和名もはっきりせず、正確な同定ができない。これについては、蝶の分類からも含めて、少し資料を集めて勉強しなおさないといけない。今回の同定は、あくまで仮のもので、日本の図鑑と、「ミクロポリス」で購入した小さなハンドブック”Les Papillons”(Editions Jean-Paul Gisserot)の2つと、絵合わせしながら行ったもので、必ずしも正確でないことを付記する。(おわり)。<平成 29 年 10 月 21 日記>